霧島市立医師会医療センター　　No. 187　平成26年7月

薬剤部 DI ニュース

～高血圧治療ガイドライン 2014（以下、JSH2014）について～

平成26年4月に2009年版から5年ぶりの改定となった今回のガイドラインの変更点を一部まとめます。

1. 降圧目標

表1に、JSH2014の降圧目標を示し、以下に主な変更内容を解説します。

①若年・中年の降圧目標の緩和

JSH2014では、若年・中年の降圧目標を「130/85mmHg未満」から「140/90mmHg未満」に引き上げました。以前のガイドラインでは、高血圧の診断基準を140/90mmHg以上としながらも、降圧目標は130/85mmHg未満としていました。そのため、130～140mmHgに降圧できた場合、高血圧の基準を満たさなくなったのに目標は達成していないという矛盾が生じていました。これを解消するために基準値と目標値を一致させました。

②高齢者の降圧目標を前期と後期に分割

JSH2014では、高齢者は前期（75歳未満）と後期（75歳以上）に分けられ、前期高齢者は従来と同じく「140/90mmHg未満」とされました。後期高齢者については、隠れた合併症を有することが多いため、「150/90mmHg未満」とし、忍容性があれば「140/90mmHg未満」を目指すこととされました。

③糖尿病合併患者の降圧目標は130/80mmHg未満に据え置き

2013年に米国糖尿病学会が140/80mmHg未満、欧州高血圧学会・欧州心臓病学会が140/85mmHg未満と、糖尿病患者の降圧目標の緩和（目標値の引き上げ）を行ったため、JSH2014の降圧目標も注目を集めていましたが、従来通りの「130/80mmHg未満」に据え置かれました。これは、日本では脳卒中の発症率が欧米に比べて高く、厳格に血圧管理することにより脳卒中予防が期待できるためです。

その他、慢性腎臓病（CKD）患者や脳血管障害患者などの降圧目標も変更されています。

表1　降圧目標（JSH2014）

	診察室血圧	家庭血圧
若年、中年 前期高齢患者	140/90mmHg未満	135/85mmHg未満
後期高齢患者	150/90mmHg未満 （忍容性があれば140/90mmHg未満）	145/85mmHg未満（目安） （忍容性があれば135/85mmHg未満）
糖尿病患者	130/80mmHg未満	125/75mmHg未満
CKD患者(蛋白尿陽性)	130/80mmHg未満	125/75mmHg未満（目安）
脳血管障害患者 冠動脈疾患患者	140/90mmHg未満	135/85mmHg未満（目安）

注：目安で示す診察室血圧と家庭血圧の目標値の差は、診察室血圧140/90mmHg、家庭血圧135/85mmHgが、高血圧の診断基準であることから、この二者の差をあてはめたものである

2. 主要な降圧薬および第一選択薬

JSH2014 における主要降圧薬は、Ca 拮抗薬、ARB、ACE 阻害薬、少量利尿薬、β遮断薬の 5 種類となりました。それぞれ積極的適応（表 2)、禁忌や慎重投与となる病態（表 3）があり、これらの病態がある場合はそれを考慮して降圧薬を選択します。

一方で、第一選択薬を「積極的適応がない場合の高血圧に対して、最初に投与すべき降圧薬」と定義し、β遮断薬を除く、ARB/ACE阻害薬（A)、Ca拮抗薬（C)、少量利尿薬（D）の4種類が第一選択薬と位置づけられました。β遮断薬が除外された理由は、糖尿病惹起作用、臓器障害抑制効果で他剤に劣るなど、総合的に判断した結果とされています。ただし、狭心症、心筋梗塞後、心不全などの心疾患合併患者に対しては積極的な適応となります。

また、単剤で十分に降圧できない場合は A＋C、A＋D、C＋D のいずれかの併用を検討し、それでも目標血圧に達しない場合には A＋C＋D という 3 剤併用を提示しています。3 剤でもコントロール不良な治療抵抗性高血圧には A＋C＋D に加えβ遮断薬もしくはα遮断薬もしくはアルドステロン拮抗薬を併用し、それでも不十分な場合はさらに他の種類の降圧薬を併用するという手順を示しています。

表 2　主要降圧薬の積極的適応（JSH2014）

		Ca拮抗薬	ARB/ACE 阻害薬	ｻｲｱｻﾞｲﾄﾞ系利尿薬	β遮断薬
左室肥大		●	●		
心不全			●※1	●	●※1
頻脈		●（非ジヒドロピリジン系）			●
狭心症		●			●※2
心筋梗塞後			●		●
CKD	（蛋白尿-）	●	●	●	
	（蛋白尿+）		●		
脳血管障害慢性期		●	●	●	
糖尿病/MetS※3			●		
骨粗鬆症				●	
誤嚥性肺炎			●（ACE阻害薬）		

※1少量から開始し、注意深く漸増する　※2冠攣縮性狭心症には注意　※3メタボリックシンドローム

表 3　主要降圧薬の禁忌や慎重投与となる病態（JSH2014）

	禁忌	慎重使用例
Ca拮抗薬	徐脈（非ジヒドロピリジン系）	心不全
ARB	妊娠 高K血症	腎動脈狭窄症※1
ACE阻害薬	妊娠 高K血症 血管神経性浮腫 特定の膜を用いるアフェレーシス/血液透析	腎動脈狭窄症※1
ｻｲｱｻﾞｲﾄﾞ系利尿薬	低K血症	痛風 妊娠 耐糖能異常
β遮断薬	喘息 高度徐脈	耐糖能異常 閉塞性肺疾患 末梢動脈疾患

※1両側性腎動脈狭窄の場合は原則禁忌

＊JSH2014の禁忌・慎重投与例と添付文書の禁忌・慎重投与の内容は必ずしも一致しておりません

参考：高血圧ガイドライン 2014、翔薬 TOPIC No.142　　薬剤部　田中